

現代エスノグラフィーの理論と実践 (4)

——「フェミニスト」と「ネイティヴ」のジレンマ——

北村 文 (津田塾大学)

1. 目的

女のことは女こそが、ネイティヴのことはネイティヴこそが、書かなければならない——声を奪われてきた者たちが表象の政治に挑戦するための実践として、「フェミニスト・エスノグラフィー」と「ネイティヴ・エスノグラフィー」は始まった。このふたつの流れは異なる歴史的・政治的背景のもとにあるいっぽうで、その理論と実践のなかで重なりあい、1990年代、時をほぼ同じくして類似の問いと対峙することとなった。「フェミニスト・エスノグラフィーは可能なのか」(Stacy 1991)、「ネイティヴの文化人類学者はどれほどネイティヴか」(Narayan 1993)という、調査者のポジショナリティにまつわる問題である。本報告では、このような相関関係を整理したうえで、自分に似ている、しかし完全に同一化することのできない「自己のような他者」を調査研究することのジレンマを再考する。

2. 方法

特に分析の対象とするのは、フェミニスト・エスノグラフィーとネイティヴ・エスノグラフィーの両面をあわせもつと考えられる調査研究である。明示的にそのように意図されたものに加えて、そうでなくとも文化人類学や社会学、日本研究といった分野でそのように読まれてきたものを含める。これらの先行研究に対して、報告者自身の調査研究についても自己再帰的に言及しつつ、批判的検討を加える。

3. 結果

何をもってフェミニスト・エスノグラフィーそして／またはネイティヴ・エスノグラフィーとするのかは、複雑な問題である。なぜならそこには、1) どう調査するか、2) どう記述・分析するか、3) どう読まれるか、という異なる位相が含まれているからだ。先行研究を分析すると、このすべてにおいて一貫してフェミニスト／ネイティヴ・エスノグラフィーであるものはむしろ少ないということがわかる。そしてその「不徹底」こそが、研究者に不可避なはずのジレンマを回避する手だてとなっているとも言える。また、文化人類学の分野では、調査者のフィールドでの経験について、エスノグラフィー本編とは別に稿を改めて出版する、ということもみられるいっぽう、社会学においてはそうした分離はあまりみられない。

4. 結論

エスノグラフィーにおいて、自己内省 (self-reflection) が自己再帰性 (self-reflexivity) にとってかわりつつあるのではないか。自身についてどこかで書けばフェミニスト・エスノグラフィーでありネイティヴ・エスノグラフィーである、という新たな学術的慣習は、批判的に見据えていかなければならないだろう。

文献

Stacy, Judith, 1991, "Can There Be a Feminist Ethnography?" Sherna Berger Gluck and Daphne Patai eds., *Women's Words: The Feminist Practice of Oral History*. New York: Routledge, 111-119.

Narayan, Kirin, 1993, "How Native is a 'Native' Anthropologist?" *American Anthropologist*, 95 (3): 671-86.